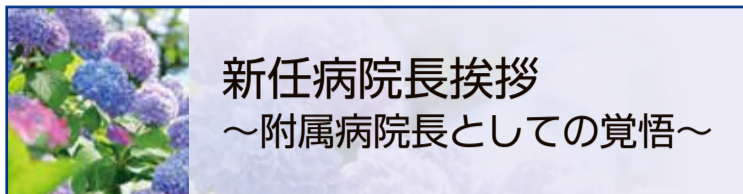


2026年(令和8年)7月2日



新任病院長挨拶
～附属病院長としての覚悟～

弘前大学医学部
附属病院長 横山 良仁



5月初旬の早朝、弘前公園を歩いた。凜とした空気の中、遅咲きの八重桜が、春の名残を惜しむように静かに咲いていた。人影の少ない園内に、ウグイスやシジュウカラをはじめとする野鳥の音が澄んで響き、その声は公園の静けさをいっそう深くしていた。遠くには、輪郭をくっきりと浮かべた岩木山が、何も語らず、しかしすべてを受け止めるように立っている。すれ違う人と交わす短い挨拶にも、この街の品格と温かさが宿っていた。これほど美しい場所のすぐそばに、命を預かる大学病院がある。なんて贅沢な街なのだろうと、改めて思う。歴史と自然が調和した弘前の街で、地域の命を守る病院に身を置いている。その朝の静けさの中で、私は、地域の医療を支える責任を病院長としてしっかり担っていく覚悟を新たにしました。

ていく必要があります。

私が目指すのは、患者さんとご家族に信頼される病院であると同時に、職員が誇りと安心をもって力を尽くせる病院です。医療安全も、診療の質も、教育も研究も、すべては現場で働く人々の献身と連携の上に成り立っています。職種や立場を越えて声をかけ合い、課題を共有し、互いを支え合う組織でありたいと思います。岩木山が弘前の街を静かに見守るように、本院もまた、地域の人々の不安に寄り添い、希望をつなぐ存在であり続けたいと思います。患者さんには「この病院なら託せる」と感じていただき、職員には「この病院を支えていくことに誇りを持って」と思ってもらえる。そのような弘前大学医学部附属病院を目指し、誠実に、そして覚悟をもって歩んでまいります。

このたび弘前大学医学部附属病院長を拝命いたしました。本院は長い歴史の中で、高度医療の提供と医療人の育成を通じ、地域の安心を支えてまいりました。青森県唯一の特定機能病院として、重篤な疾患への対応、高度な治療、救急・災害医療、周産期・小児医療、がん診療、被ばく医療、教育、研究を担う本院は、まさに地域医療の最後の砦です。その役割を途切れさせることなく、次の時代へ引き継ぐことが、私に課せられた使命であると受け止めています。

一方で、大学病院を取り巻く環境は厳しさを増しています。人口減少、少子高齢化、医療人材の不足、物価や人件費の上昇、働き方改革への対応、そして高度医療を継続するための経営基盤の強化。これらはいずれも、避けて通ることのできない課題です。理念を語るだけでは、病院は動きません。現場の声に耳を傾け、業務改善、タスクシフト、DXの推進、人材確保、研究支援、休暇を取りやすい環境づくりを、一つずつ形にし

2019年度に働き方改革の取り組みの一環として夜勤用ユニフォームを導入しました。日勤者と夜勤者が視覚的にわかり、仕事の効率化の意識改革につながりました。今年度はかねてから要望のあったズボンの色を、夜勤用だけではありますが、白から紺色に変更しました。ズボンの色が変わるだけで印象が違うものだなとみえています。以前主流だった3交代勤務の部署はなくなり、全部署2交代勤務となったため、13時間や16時間という長い時間の夜勤を、少しでも快適に過ごしてほしいと思っています。今後は、日勤

用ユニフォームのリニューアルを考えています。日勤用ユニフォームは、弘前大学看護部オリジナルデザインで、長年身につけているため愛着があります。しかし色付きにしてほしい、体形が目立たないデザインにしてほしいという声が多くなりました。また、個人貸与制のため洗濯後の仕分け作業、サイズに応じた注文などに時間がかかることや体形変化に対応しづらいなどの課題があります。その課題解決のためデザイン変更とリース化を検討します。最大の難関は、ユニフォーム置き場の確保とリースの費用です。場所がな

各診療科等の紹介 【総合診療部】

弘前大学医学部附属病院総合診療部です。この度、「南塘だより」の紙面をお借りして、当部の紹介をさせていただきます。「総合診療部」と聞くと、診療内容をイメージしにくい方もいらっしゃるかもしれませんが、私たちは、特定の臓器や病気だけにとらわれず、患者さんの心身をひとつのつながりとして捉え、全体を見ながら診療を行っています。

当部では、若年者から高齢者まで、幅広い年代の患者さんを対象に診療しています。発熱、倦怠感、体重減少、痛み、めまいなど、症状はあるものの原因がはっきりしない方、複数の病気や生活背景が関係して診療方針に悩む方に対し、丁寧な問診と診察を通じて問題を整理し、必要な検査や治療、適切な専門診療科への橋渡しを行っています。

現在、当部はスタッフ3名、専攻医1名の計4名で診療にあたっていますが、互いに密に情報を共有し、機動力を活かした診療を心がけています。地域の医療機関からご紹介いただく、診断や対応に悩



む患者さんについても、院内の各診療科と協力しながら、よりよい診療方針を検討しています。また、日々の診療とあわせて、これからの地域医療を担う若手医師や総合診療専門医の育成にも力を入れています。県内の総合診療部や総合診療に携わる医療機関と学び合いながら、青森県における総合診療の充実に取り組んでいます。大学病院としての専門的な診療機能と、地域に根ざした総合診

療の視点を大切にしながら、患者さん一人ひとりに必要な医療を届けていきたいと考えています。今後も地域の医療機関とのつながりを大切にし、津軽地域、そして青森県全体の医療に少しでも貢献できるよう、診療と教育に誠実に取り組んでまいります。今後とも総合診療部をどうぞよろしくお願いいたします。

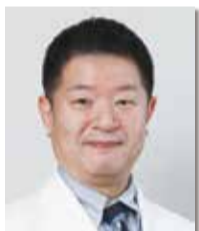
(総合診療部 准教授 米田博輝)

令和8年度執行部新体制が始動

令和8年度の執行部体制がスタートしました。横山病院長のもと、よりよい病院づくりに取り組んでまいります。



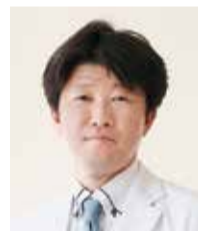
副病院長
田坂 定智
呼吸器内科学講座
教授



副病院長
漆館 聡志
形成外科学講座
教授



副病院長
新岡 丈典
薬剤学講座
教授



副病院長
櫻庭 裕文
消化器血液免疫内科学講座
教授



病院長補佐
青木 昌彦
放射線腫瘍学講座
教授



病院長補佐
玉井 佳子
輸血・再生医学講座
教授



病院長補佐
照井 君典
小児科学講座
教授



病院長補佐
藤田 征弘
内分泌代謝内科学講座
教授



病院長補佐
掛田 伸吾
放射線診断学講座
教授



病院長補佐
畠山 真吾
泌尿器科学講座
教授



病院長補佐
松坂 方士
医療情報学講座
教授



病院長補佐
長尾麻紀子
看護部長
看護部

(総務課)

先憂後楽

働きやすい
職場環境づくりに向けて



看護部 長尾麻紀子

い、物価が高い、社会全体で資源不足という3つの問題の中、実現に向けて計画を立てたいと思います。

例年、看護の質の向上と職場環境改善をテーマに看護部門目標を策定しています。ひとつは「いきいき持続して働き続けられる職場環境づくり」です。働きやすさに関する要因として、ユニフォームの機能性、仕事量、人間関係、ワークライフバランス、健康状態など多数あります。目標の活動方針に「心理的安全性の高い職場づくり」を掲げています。心理的安全性の高い職場環境は、医療安全

文化の醸成にもつながり、看護職員だけでは成しえません。わからないこと、疑問に思うことがあれば、相手に聞いたり、確認したりが安心してできる関係性、職場風土が構築されることを期待しています。

ウェルビーイングという言葉に耳にする機会が増えましたが、病院全体で患者、職員共によりよい状態を目指すことに取り組み、一人ひとりが少しでもよい変化を実感できるようになってほしいと思います。

イタリア・カターニア大学病院から 外国人医師を受け入れ



本院放射線診断科では、2026年4月14日から5月12日の期間において、イタリア・カターニア大学病院から医師3名を受け入れました。

カターニア大学とは2018年3月に大学間交流協定を締結し、これまで教育・研究・学生交流を中心に連携を深めてきました。過去に本院からカターニア大学への医師派遣を2025年3月に2週間程度で3名行い、2025年9月前後にも2週間程度で4名行いましたが、本院での受け入れは今年度が初めてとなります。

今回受け入れた医師3名は、本院施設や被ばく医療総合研究所の見学、放射線診断学講座での研修を行いました。被ばく医療総合研究所では、末梢血リンパ球細胞の単離・培養、染色体標本作成、ギムザ染色、核型解析および染色体異常解析など、細胞遺伝学的線量評価法に関する技術研修を行いました。放射線診断学講座では、画像読影や血管内治療の見学、研究内容の相互紹介などを行い、専門的な知見の共有と交流を図りました。

今回は、桜が満開の時期と受け入れ時期が重なったということもあり、弘前城の桜の他にも県外客で賑やかな弘前の様子を堪能できたということです。また、過去に本院医師をカターニア大学へ派遣した際に現地で受け入れを行った医師が、今回本院で研修を受けるということもあり、久々の再会を



果たすこともできました。

今後、本院からの留学生派遣も予定しており、交換留学を通じて相互交流を推進する予定です。

(総務課 臨床教育・国際担当)

ライスボールによる院内コンサートを開催



地元の音楽事務所である有限会社リンゴミュージック様から“入院患者さんを励まし、元気になってもらいたい、そしてそれを支える病院職員に感謝の気持ちを伝えたい”とお申し出により、本院ではリンゴミュージック所属のタレントをお迎えして院内コンサートを毎年開催しております。

今年は、4月27日にライスボールをお迎えして「ライスボール スペシャルライブ in 弘大病院2026」を開催しました。

ライスボールは、青森県内を拠点として音楽活動に限らず地元のテレビやラジオ番組でも大活躍のボーカルグループです。コンサートでは、青森県ならではのオリジナル楽曲「101回目の桜」、「はれわたり」、「ホタテのジルバ」など全9曲を披露しました。会場には入院患者さんと職員合わせて約

170人が訪れ、ライスボールの歌とダンス、そして地元言葉での軽快なトークで笑顔が溢れ、楽しい一時を過ごすことができました。

全員が保育士の資格を持ってい

るライスボールですが、コンサートの前には小児医療センターを訪れ、闘病中の子供たちの病室を訪問し、子供たちへプレゼントを手渡しして励ましたり、楽しい会話で元気づけてくれました。(医事課)



看護の日～看護の心をみんなの心に～

5月12日は「看護の日」です。近代看護を築いたフローレンス・ナイチンゲールの生誕を記念したこの日は、「看護の心」「ケアの心」「助け合いの心」を育むとともに、その大切さを広く伝えることを目的として制定されました。看護部では、毎年、外来待合ホールに生花を展示し、「看護の心をみんなの心に」という思いのもと、来院された皆さまへやさしさと癒しをお届けしています。今年は青色を基調とした華やかな生花が飾られ、落ち着いた品のある雰囲気の中、ほのかに花の香りが漂い、訪れる方々の心を和ませていました。入院患者さんお一人おひとりには、一日も早い回復への願いを

込めて、メッセージカードをお渡ししました。小児医療センターでは、日頃の子供たちの頑張りをねぎらうメッセージに加え、好きなキャラクターのイラストや似顔絵を添えるなど、小さなお子様にも喜んでいただけるように工夫しました。カードを受け取ったお子様が笑顔になり、「ありがとう」と感謝の言葉を伝えてくれる場面

も多くみられ、私たちにとっても心温まる機会となりました。看護の日から数週間が経過した後も、メッセージカードを病床に大切に飾ってくださる様子が見られ、看護の心が子どもたちへ確かに届き、つながっていることを実感

し、大きな励みとなりました。今後も、こうした取り組みを通じて、思いやりの心を大切に、患者さんにご家族にさらに寄り添った看護が提供できるように努めてまいります。

(入院棟東3階 看護師長 村上陽子)



5月12日は「看護の日」



【編集後記】

南塘だより121号をお届けします。

朝晩は冷え込む日もありますが、日中は日差しが強まり、初夏の訪れが感じられる季節となりました。

5月中旬には、はるか夢球場にて楽天 vs オリックス戦とりんご娘のスタジアム LIVEが開催され、いずれも1万人を超える集客がありました。6月末には、はるか夢球場にて巨人 vs ヤクルト戦が開催されます。本県での巨人の一軍公式戦は実に67年ぶりの開催となります。夏祭りが終わると48年ぶりの本県開催となる国スポ・障スポが開催されます。リフレッシュを兼ねて街に出かけてみませんか!!

今年も季節の行事やご家族とのひとときが、皆さまにとってよき思い出となりますようお願いしております。

(病院広報委員会委員 山田修平)

弘前大学医学部附属病院へのご寄附、 心より御礼申し上げます

お名前の掲載をご承諾いただいた方に限り、ここにご芳名を掲載させていただきます。今号では、令和8年2月から令和8年4月末までの間にご入金を確認させていただきました方を公表させていただきます。(管理課)

【さくら基金 寄附者ご芳名】

○古川 陽司 様
匿名希望 6名

【診療科等 寄附者ご芳名】

○大石由紀子 様 ○澤田 直也 様
○医療法人社団 伊東クリニック 伊東 重豪 様
○米田 弘 様
匿名希望 3名

*掲載の同意をいただいた方以外は、匿名希望とさせていただきます。